

この8月15日の前後、私は、吉田満が書いた『戦艦大和の最期』（ちくま学芸文庫）という本を読み返しました。この本は、学徒出陣で戦艦大和に乗務した吉田が、九死に一生を得て帰還したのちに書いた覚書です。沖縄への特攻出撃の前夜、青年士官は自分たちが何のために死ぬのか論争しました。最後にたどり着いた答えは、自分たちが死ぬことによって日本人を目覚めさせるということでした。日本人が自国の命運について主体的に考え、戦争という誤った道を二度と歩まないようにさせるために、特攻作戦に従事した将兵は死んでいったのです。

あれから74年。今、日本人は目覚めるどころか、再び妄想、敵意そして憎悪の中にどっぷり浸り、隣国を敵視する議論に賛意を示しています。これでは、戦争犠牲者は浮かばれません。

もう1つエピソードを申し上げたいと思います。8月末、私はゼミの学生とともに熊本の水俣を訪問し、川本愛一郎さんの話を聞きました。川本さんは、チッソの責任を迫及した自主交渉という運動のリーダーだった川本輝夫さんの息子さんです。私が、川本さんはなぜ自主交渉という苦難の道を選んだのかと尋ねたところ、愛一郎さんは、父は人間を信頼していたからだと言いました。自分たちの尊厳を回復するために、加害企業の幹部と直接会いたいというのが輝夫さんの思いだったそうです。人間への信頼という言葉に、言いようのない感動を覚えました。

安全な場所にいる人にとって、自分たちの尊厳を守るために必死で戦う人は過激に見えるかもしれません。現在問題になっている韓国の元徴用工や従軍慰安婦の方々も、自分たちの尊厳を回復するために人生の最後に必死の戦いをしているのだらうと思います。それを過激と切り捨てるべきではありません。今問われているのは、私たちが人間の尊厳を守る意思を持つかどうかです。

安倍政権は、隣国への敵意や憎悪を煽り、政権への支持を取り付けるという禁じ手を使っています。ナショナリズムを政治的な道具にすることに対しては、私たちは間違っていると断言しなければなりません。そのような声は、現時点では少数でしょう。かつて石橋湛山が、満州や朝鮮半島の植民地支配を批判し、すべてを捨てよと主張したとき、湛山も少数派でした。しかし、歴史は湛山が正しかったことを証明しています。私たちも、今は少数であっても、私たちの正しさは歴史が証明してくれるという確信をもって、批判を続けていきたいと思いません。

政治の世界では、こうした批判の声はか細いものです。野党の政治家は、多数の国民の感情に逆らうことを恐れているように思えます。私たちは、野党の政治家に対して大局観に基づいて、ナショナリズムを政治的に利用することにはつきり反対するよう求めていかなければなりません。